
闇ノ帝王~Dark Emperor~

kyouya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇ノ帝王~Dark Emperor~

【Nコード】

N4587Q

【作者名】

kouya

【あらすじ】

???人は強いからいっぱい人を守るんじゃないって、今更気がついた。

東京都内に住む鏡谷鈴音^{かがみやすずね}は、生まれたときから奇妙な力を持っているながらも、普通の高校生活を送っていた。だが8月15日の夜、その日々は終わりを告げた???アイツが来てから。

人の心を描く、異世界バトルファンタジー作品。

強クナリタイヨ

「——なんで死んじゃったの？」

自分で作った墓の前で、僕はそうつぶやいた。

そこにいる僕は、手がところどころで切れてボロボロだった。足だって膝が砂だらけで、はたけば砂埃みたいに粉塵が舞う。

それだけ探しても、花も見つからなかったし、石だってゴツゴツとしたものしかなかった。

「??お墓もまだろくに作れないのに」

ザア・・・と風が砂利を巻き上げる。そんな音以外に何も聞こえない、何もない荒れ野。

周囲に人はいない。人どころか獣も虫も見かけない。まるで世界が自分以外に誰もいなくなってしまうたようだった。一瞬だけ、からっぽだった僕はわずかな不安を感じた。

日が傾いていく。金色に輝く夕日は空も地面も真っ赤に染めあげる。自分だけ、黒い点々として存在していた。

「——僕を一人にしないって言ってたのに」

感情のこもらない声で、僕はまたつぶやいた。

「——一人ではまだ生きていけないって言ってたのに」

墓前で、「君」に向かって僕は話しかける。

「君」がそこにいないことくらいわかってる。

わかってるから、こんなにも苦しいことも、僕はわかってた。

「——まだ僕、一人で誰かと関われるくらい、強くないよ」

だから、何度も何度も話しかけずにはいられないよ。

話すことをやめることは、まだ今はできないから。

「——一人でごはんを食べていくこともできないよ」

でも知ってるよ？ そのうち悲しくなってきたら、

「一人で・・・誰かを・・・信じることも・・・できないよ」
涙を流すことをこらえることだってできなくなってくるって。

「ねえ・・・話してよ・・・」
鼻水だつてでちゃうよ。

胸だつて、誰かに締め付けられてるみたいに窮屈で、苦しいよ。

「まず、起きあがって・・・おはようって言ってさ・・・そのあと、またいつもみたいにあちこち歩き回って・・・疲れたらお水飲んで・・・おなかすいたらまたごはん食べて・・・」

きつと、締め付けてるのは「君」だね。

だって、「君」のことを思うから、こんなに元気が出ないもの。

「・・・でさ・・・」

君のせいだよ。

「・・・また・・・おやすみって言って・・・別々で分かれて寝るんだ・・・もう、僕おつきいから」

君のせいだよ？ 僕が痛くて窮屈に感じるのは。

「すぐ寝て・・・起きて・・・また・・・おはようって・・・」

息がどうしても荒くなって、上手くできないのも。

ボロボロと大粒の涙が出るのも。

「起きてよ・・・」

静かに、でも必死に言葉を紡ぐ僕。

息がゼエゼエと短くなって、鼻水もダラダラと出ちゃって・・・

それで、もう目の前の「君」も見えないんだ。

見えないだけなんだ。まだそこにいるんだ。

だから、涙が止まってほしいよ。

「・・・おはようって言っただけでいいから・・・起きてよ・・・」

でも。ホントは止まってほしくなかったり。

「・・・あ」

だって。止まっちゃうとわかつちゃうでしょ。

「君」が、いないことが。

「・・・まだ、消えないでね」

どうしてそんな言葉が出てきたのかわからなかった。

理由はない。いや、わからないだけかもしれない。

わからない気持ちがいっぱい浮かぶ。でも、それを拒むことはしなかった。

「・・・きつと、強くなるから」

わかるまで、涙は止めない。

涙を止められるくらいに、

「・・・誰よりも、強くなるから」

自分一人で生きて、安心していられるくらいに、

「・・・誰よりいっぱい、人を守るくらい、強くなるから」

そして僕は・・・俺は、一人で歩いて行った。

小さくて粗末な墓と、いつまでも泣きじゃくる『僕』を置いて。

強クナリタイヨ（後書き）

感想プリーズ＞（
し）＜

Days

「はぁ…はぁ…」

呼吸を整えると、すぐに息を殺した。

今、私はある隙間に縮こまっている。そこは、光が入ってこないで目をこらさなければ何があるかわからない、狭くて小柄な者でなければ入ることもできない場所だった。

そんなところで隠れるにはもってこいだったが、そんな場所に手入れなどされているはずもない。ほこりや細かいゴミなんかが集まっていて、できれば二度とここへは来たくない。

(…ここで…撒けるかな)

意外なほど追っ手の気配はない。静かだった。壁から住人の生活音が聞こえてくるほど静まりかえっていて、逆に不気味なほどに。

どのくらい時間が経ったのだろうか。少なくとも5分はそこにいたが、足音一つ聞こえてはこなかった。

(…撒いた?)

私は肩すかしをくらったような気がした。

おかしい。確かにアイツらはすぐ近くまで迫っていたはず。隠れるところを見られはしなかっただろうが、隠れてから3秒ほどでここに隣接した通りに来れるはずだ。

…実際はそうではなかったとか?

「……………」

どこか腑に落ちないところがありながらも、自身の危機が消えたことに、私は心底ホッとした。

が。

(今だ!!!)

聞こえた。耳に直接響くような変な声が。その声に反応して、反射的に後ろを見た。

振り向いた瞬間ギョツとした。

自分のすぐ後ろで、北澄きたすみの不良が私に襲いかかろうと手を振り上げていた。

(ツッ!ー!)

相手もまさか私が振り返ると思わなかったのか、目が合った瞬間に固まった。それが隙になり、顔に一発お見舞いすると私は路地に飛び出した。

「ああもうホントになんでそんなにしつこいのよーツッ!ー!」

自分に迫り来る北澄の不良から、鏡谷鈴音かがみやすずねは走って逃げる。

まったくいやになる。北澄の不良がこんなにしつこくてうざったいとは今まで知らなかった。とりあえず少しかまって最後に一発かませばそれで終わる、というのが大抵だったので、それも仕方がないかもしれない。

そもそもこいつらは自分を標的にしていたのではない。朝方に桐方学園うちの女子生徒に手を出していたので、それを一蹴しただけ。

で、なんでこうなる?

買い物の帰り道で、巣穴から出てくる大量のアリみたいにぞろぞろと小道から出てくるなんて発展がある?

なんで、このときに、『まあまた蹴り飛ばして帰ればいっかー』とか狂った思考が働く?

後ろを見るわけにはいかない。そんなことをすればその瞬間に一気に距離を詰められてしまうからだ。

足音からして、距離は約5メートル。さきほどから図体のでかい奴は通れなさそうな小道ばかり通ってるのに全然振り切れない。あっちは息を切らしているがこっちも息が上がってきた。

もう少し大通りを走って通行人にこの状況を見てもらえば一発で即逮捕なのだろう。

でも今の状況が最悪。

この近辺に猟奇殺人犯が出ていて、住人の皆さん出てくれる気配が全くありません。

最悪なことに今の時間は、今までの犯行の時刻と合致。こいつらみたいに外に出たとなればそいつはただのバカだ（私を除いて）。

（仕方ないでしょ！ 冷蔵庫に食品なかったんだから！ 今日買わないと超貧相な晩ご飯で明日を迎えないといけないんだからもういやあああああ！！）

そのせいで大通りに人はいない。通りかかる車はさすがにあるが、台数は異常に少なく、それはすぐにどこかへ行ってしまう。大通りに出たらあいつらバイクとかで私を追いかけやすくなるので逃げられる可能性は逆に大きくなる。

家にも帰るわけにはいかない。帰ったらあいつら絶対家の中に侵入してくるし、なんとかあったとしてもこれから来ないという保証はない。

つまり、なんとしてでもここで撒くしかないのだ。

「なんで買い物帰り！？　なんでいつも通ってる店知ってるの！？　買い物袋片手に走る女の子の身にもなってみなさいよあんならーっ！！」

余計体力を使うとわかっていてもこれは叫ばずにはいられなかった。ストレスを少しでも発散しなければ、この状況ではどうにかなくなってしまいそうだ。

と、自分の一番近く——あと1メートルほどにまで接近してきた奴が出てきた。

うっわやべー！！　と焦る鈴音。
すると、

「クソツタレがあ！　止まれやこの貧にゅ」

Days—2—

「・・・はあ・・・はっ、は・・・はあ・・・」

気がつくとも鈴音はいつもマンガを買っている本屋前にいた。

先ほどまで自分をストーカー以上に追い回していた北澄の男どもはどこにもいない。

「やっと撒けた、あー苦しかった。てか、なんであんなことで因縁つけられなきゃなんないの・・・」

愚痴らずにはいられない鈴音。だが状況は想像よりかは比較的良好だった。ビニール袋の中を見る限り、どうやら具材がバーテンダーシェイク状態になっている心配もない。しかも、ここから自宅まで10分もかからない。帰宅までの道のりバカどもとまた遭遇する可能性もある。道のりが短いのはよいもの。不幸中の幸いというやつだった。

（あぁー汗だくだ。しかもなんかタバコ臭いし・・・うわぁーニコチン特有の刺激臭がするよー！早く家に帰って風呂に入らなきゃ。そういうえば、部活や宿題でお気に入り番組見てなかったっけ・・・よっしご飯中に一、二個くらい見ときますかーっ！）

と意気込んだのはいいものの、足がフラフラとよろめいてろくに歩くこともできない。

何キロもの道を走破した後なのだから、のどが乾いているしクタクタなのは当然だった。

（・・・ジュース買お）

あたりをキョロキョロと見回していると、自動販売機がベンチの隣にある。ちょうどいい、体力も回復させてもらおう。

「・・・まあ、今回は炭酸はやめというスポーツドリンクにしとこうかな。疲れてるんだし」

自動販売機に150円を入れてどこにでもありそうなスポーツド

リンクのスイッチを押す。出てきたそのキャップを取り、口に付けた。

やっぱり疲れた時のスポドリほどいいものはないなー、と鈴音は改めて思った。一口飲むだけで、鈴音の足を起点にして疲れがとれてきたような気がした。

一息ついた鈴音はベンチに座る。すると瞬く間に睡魔が鈴音に襲いかかってきた。このまま眠りたかったが、ここで寝てしまつては連中にどうぞいたぶってくださいと言うようなもの。少し残念だった。

しばらくすると、呼吸も安定したし疲労も回復してきた。

（はあー、だいぶ疲れとれてきたな。もう11時だしこれ以上寄り道するのもまずいな。このまま家に帰ろつと）

そして鈴音はそのまま家へ一直線に帰る

はずだった。

「おらあ！！　ちよつと止まれやクソ野郎ども！！」

ビクッ、と震える鈴音。

突然叫び声が聞こえてきた。今自分が逃げてきた方向から。おまけになんだか数分前に見たことがあるような制服を着た男どもが見える。

（・・・ん？）

さっきの声、なんだか数分前くらいに聞いたことがあるような気がする。

・・・まさかとは思うけど、でもやっぱりそんなことないよね。

「おいコラ！！　止まれつつつてんだよデカブツとチビが！！」

よく見ると二人の男が見える。

一人は小さく、もう一人は普通・・・いや違う、よく見るともう一人の背は2メートルほどもある。たぶん比較する人が人だからチビに見えるんだろう。

「誰がチビだゴルァ！　なんだ、おまえのツルツル頭まぶしいん

だよクソが!!」

「ちよっ、共夜、相手を刺激しないでよ　せめてスキンヘッドピカピカしてんなくらいで」

「おまえが一番刺激してんだろがアアああ!!」

もう遅かった。北澄はその一言でまた更にスピードをあげてきた。

（なんでこっちにまっすぐ来るの!?　か、隠れるとこないし・
・で、でも、あいつら私に気づいてないかも）

かすかな希望にすぎる鈴音。

神様は自分に微笑んでくれていたらしい。二人を追って自分の前を通り過ぎていった。

ほっと胸をなで下ろす鈴音。

「ん・・・?　あっ、ああ!!　いたぞあの女ア!!」
あま

神は私を見放した。所詮浅はかな淡い願望でしたよねハイ。

「おらテメエこの野郎!　ようやく見つけー」

連中の目をめがけて鈴音はスポーツドリンクをぶちまけた。

「はいこれ私のおごりじゃあね!!」

全力疾走再開。第二ラウンドあるとか聞いてませんーっ!!　と心の中で怒鳴る鈴音。今日はとことんついてない。

十字路に差し掛かって右に曲がると、先ほどの二人と並んだ。

「あア!?　テメエなに横に並んでんだよついてくんなよ!!」
いきなり小さい方の男が怒鳴ってきた。

髪が紺色。漆黒のコートで身を包み、あちらこちらに十字架のアクセサリーをぶら下げているその男は、まるでどっかの聖職者だ。

こんな鬼ごっこの途中で怒鳴るなど体力の無駄だが、不条理な理由で怒鳴られると、鈴音も反論はしたかった。

「うっさいわね!　あんたのせいでまた追われることになってんのよ、ちよっとは自重して!!」

「なんだそりゃ責任転嫁かふざけんなよバカ野郎が!!」

反論に次ぐ反論。はつきり言って疲れるだけ。

「てゆーかあんたら、なんで追っかけられてるわけ！？ あいつらアタシを追ってたはずなんだけど！！」

当然の質問だった。さっきまで自分をしつこく追い回してた奴らが簡単に標的を変更するなんて思えない。

「えーとなんだっけ？ あの人ら女の人見なかったかって質問してきてそれで「見ませんでした」って答えたらなんか怒られた」

「面と向かって「ついでにその髪型おもしろいですね超ウケます」とか言われたら誰でも怒るわボケが！！」

「え？ 僕褒めたつもりだったんだけど。絶対あの人芸人やれるって」

「おまえただのバカだろオオおおお！！」

そうかなあ？ と首を傾げる男。紺髪――（とでもいうのか？）の言うとおり、ぜってーこいつアホだ。

アイツらも標的を逃して苛立ってたんだろう。それで面と向かって悪口叩かれたら、結果なんて誰でも予測できる。

「ああもういい、十分わかった！ この先十字路！ 三手に分かれるわよ！！」

その一言で二人は前方へと顔を向き直した。鈴音の言ったとおり、道は三つに分かれている。

わざわざ見ず知らずの人に十字路だと教えたのは、三手に分かれることで相手の数を拡散させるため。よく言えば三人とも逃げやすくするため。悪く言えば二人を餌にして自分を逃げやすくするため。

「うっしや帝都、おまえは左！ 俺は右曲がるぞ！！」

そしてそのまま鈴音は前進、帝都とかいう大男は左へ曲がった。すると、北澄の奴らも三手に分かれた。

（よしっ、これでねらい通りー！）

が、左右方向の人数は少なく、なぜか直進方向（鈴音）に人数が集結していた。

（最悪だああ！　もういい！　なにが何でも逃げ延びてやるう
ろうう！）

そのまま鈴音は渋谷区を激走した。

自分に迫り来る人災を振り払うために。

「はっ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

今度は家から少し離れた公園で立ち止まった。

ようやく撒くことができた、と確信できたのはもう12時になっ
てからだった。

（は、ははっ。逃亡・・・成功・・・ここから家へは20分くら
いかかっちゃうけど・・・いっか）

と、安堵する鈴音。

だが、何か足りない気がした。何か大切なものを忘れている気が
???

「・・・あ」

?? 貴重な食料が入った、ビニール袋。

自動販売機のジュース150円。今日買った食品でたまごが4個
入りで98円ほど。あとは野菜類でキャベツ1個（150円）。
安売りされていた鶏肉1パック（154円）。焼きそばの麺一人分
（168円）。ソース一本（100円）。あと奮発してスイカ（の
アイス150円）を入れた。今回浪費してしまった金額は、

「せ・・・千円・・・？」

千円。口にすればたった四文字の言葉は、鈴音の精神をどん底へ
蹴落とした。

今日は焼きそばが待っているはずだった。

豚肉は贅沢だから鶏肉にしたとはいえ肉入り。野菜もちゃんと入
ってる。キャベツただけだけど。

その夢は、簡単にぶち壊された。

また始まるのか、地獄の極貧食卓が。

晩ご飯に味噌汁（具なし＋味噌が従来の1／4）のみという大戦中よりすばらしくお粗末な食卓が。

神様は私にこう告げました。

天国はおあずけ。さっさと地獄へ堕ちろ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4587q/>

闇ノ帝王~Dark Emperor~

2011年10月7日14時14分発行